

[実践報告]

## Can-Doリストは英語が苦手な日本人大学生の英語力向上と 動機づけに効果を与えるか

### How Effective are Can-Do Lists Improving Japanese University Students' Low-Level English Ability and Motivation in Basic English Class?

細 川 真 衣<sup>\*1</sup> 西 村 洋 一<sup>\*2</sup>

#### 要旨

本研究ではCommon European Framework of Reference for Languagesに基づいたCan-Doリストを用いた指導が、英語を苦手とする日本人大学生の英語学習者の英語力向上と動機づけに効果を与えるかを検証した。今回の分析結果では動機付けにやや効果があったが英語力向上に効果があるとはいえないことが示された。

キーワード：CEFR／Can-Doリスト／動機／英語力向上

#### 1. はじめに：研究の背景と先行研究

文部科学省（以下「文科省」と略）は、グローバル化が進む中で日本人の英語力が低いがゆえに不利益を被っていることを公にし、2002年に『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想を発表した（文科省2002）。さらに2011年には「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」を打ち出した（文科省2011）。その中では2002年に示した目標値（中3で日本実用技能検定3級、高3で準2級）が30%程度の達成度と英語力が低迷していることに加え、海外へ留学する高校生・大学生の減少などの「内向き志向」が課題として示され、具体的施策として、学校で学習到達目標をCan-Doリストの形で設定・公表すること、グローバル社会における英語の必要性について理解を促し英語学習のモチベーション向上を図ることを提言している(文科省2011:7-

9)。また参考とする諸外国のCan-Doリストの例として「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment、以下「CEFR」と略）」を提示し、その一部を掲載している（文科省2011:44-47）。

CEFRとは人や物流の往来が盛んな欧州で、国や地域を超えて、学習者の言語能力の熟達度のレベルを「何ができるか（Can-Do）」によって測る尺度として、Council of Europeが行動中心主義と複言語・複文化主義に基づいて作成したものであり（吉島・大島2004:1）、現在38言語に翻訳され、実践・研究が進められている（Council of Europe 2012）。日本でも京都大学、大阪大学、慶応大学、早稲田大学、国士舘大学など多くの教育・研究機関で研究が進められている（慶応外国語センター2005-2009、日本独文学会ドイツ語教育部会、日本フランス語教育学会、大学英語教育学会教育問題研究会、神保科研、酒井科研、大崎科研2011:64）。

外国語としての英語（English as a Foreign Language以下「EFL」と略）という日本の環境で、学習者が「内向き」にならず、グローバル社会に

おける英語の必要性を理解し、実感するためには、「教室内、学校内の英語」としての指導ではなく、世界に視野を広げさせるための工夫が必要である。CEFRは「従来の文法中心の言語学習に、異文化理解の側面をも意識しつつ『コミュニケーションのため人は言語を用いて何ができるようにならねばならないのか』という視点を加味しており、いわば立体的な言語学習モデルを提示している」（慶應義塾大学外国語教育研究センター2011）。この世界基準のフレームワークを用いることで、学習者にグローバルな視野を持たせ、英語でのコミュニケーションという点で今自分には世界で何ができるのか、これから何ができるようになりたいかを考えさせることができ、学習の動機づけに繋がると考える。

筆者らは、以上のような背景に基づき、先の研究（米田・西村・細川2011）において、Can-Doリストを用いて学習の目的を示したグループのほうがそうでないグループより動機および学力が向上するのではないかという検証を行った。その結果学力上位群（TOEIC Bridge 130～150点）ではその効果は断定できず、学力下位群（TOEIC Bridge 50～80点台）では学力が有意に向上したが同時に動機は有意に下がった。一方、人数が少ないことや動機変化を見るには前期のみという調査期間が短かったこと、見通しを持った学習を目指したCan-Doリストの使用群の動機が下がった要因が特定できなかったことなどが課題として残った。

本研究ではこれらの課題を踏まえ、大学生の日本人学習者の中でも英語を苦手とする学生を対象に、英語力と動機における

Can-Doリスト使用の効果を検証する。

なお、共同研究としてアンケートの作成は本共同研究メンバー、授業実践については執筆者を含め6名の教員、統計分析は西村が行った。執筆担当箇所については巻末に担当を記す。

#### 2. データ収集：方法・対象

##### 2.1 方法

学力テストと動機アンケートを用いて実施した。学力テスト：

TOEIC Bridge とケンブリッジ英検 Young Learners English Test（以下「YLE」と略）のMoversのSample Paper（以下「模試」と略）を使用した（University of Cambridge ESOL Examinations 2011）。ケンブリッジ英検はCEFRと直結しており、世界基準で学力を測り、また学習者にグローバルな視野を持たせるため、世界で使用されているテストを用いるべきだと考え使用することにした。YLEは本来7～12歳用であるため、本来は大学生には年齢的観点からは不適切である。しかし対象とする学生のレベルが入学時に実施されるTOEIC Bridgeで60～120点であることから、Moversを実施することとした（表1参照）。

表1 CEFR、ケンブリッジ英検、TOEIC、STEP英検対応表

CEFR	Cambridge Examinations		TOEIC	TOEIC Bridge	STEP 英検
	Main Suite	Young Learners			
C2	CPE		970～		Level 1
C1	CAE		920～		
B2	FCE		850～		
B1	PET		650～		Level Pre-1
A2	KET	Flyers	570	～160	Level 2
			470	～150	
			～390	～140	Level Pre-2
			～345	～130	
A1		Movers	～310	～120	Level 3
Pre-A1		Starters	～280	～110	Level 4
			～260	～100	Level 5

（森下2005: vi-vii, Educational Testing Service(2001, 2006), University of Cambridge ESOL Examinations(2009)を参考に作成。）※濃いグレーは対応するものがない事を示す。

\*1 HOSOKAWA, Mai  
北陸学院大学 非常勤講師

\*2 NISHIMURA, Youichi  
北陸学院大学 人間総合学部 社会学科  
社会心理学

また、本来は4技能を調査することが理想であるが、Yoneda & Hughes (2010) の研究により中学生以上はリーディング・ライティングのテスト結果が4技能の学力の指標となることが示され、米田他 (2011) の研究で大学生においてはリーディング・ライティングテストの結果が英語力の指標になり得ると示されたことから、今回はリーディング・ライティングのみを実施した。

Can-Doリスト:

Council of Europe (2006)、慶応大学外国語教育研究センター (2006)、金沢大学外国語教育研究センター (n.d.)、吉島・大橋 (2004)、JACET 教育問題研究会 (2011) 等の研究資料を基に作成を行った (資料1)。

動機アンケート:

物井 (2009)、CEFRのCan-Do (吉島・大橋2004:25、日本独文学会ドイツ語教育部会、日本フランス語教育学会、大学英語教育学会教育問題研究会、神保科研、酒井科研、大崎科研2011) などに基づいて本共同研究メンバーで作成した (資料2)。

時期:

2012年4月 (前期授業開始時) と、7月 (前期授業終了時) に実施した。

2.2 対象:

大学1年生用必修基礎科目履修者124名中84名である。学生は全て英語専攻ではない。入学時にTOEIC Bridgeを受験し、授業及び調査は15～25名程度の学力別6クラスに分けて行われた。本研究で対象としたのは、そのうちTOEIC Bridge60～120点台の4クラスである。

2.3 Can-Doリスト使用群と未使用群

上記対象者のうち、TOEIC Bridge60点台～90点台の1クラスを対象にCan-Doリストを使用した (Can-Doリスト使用群)。日本語で書かれた、文法の基礎を重視した教科書を使用し、日本語で指導を行った。

上記の対象クラス以外の3クラスはCan-Doリ

ストを使用しなかった (Can-Doリスト未使用群)。全て英語で書かれた、文法とコミュニケーションを重視した教科書を使用し、原則英語で指導を行った。

3. 分析方法と結果

3.1 動機測定項目の得点化

動機関連の測定測度として、物井 (2009) において使用された国際的志向性尺度22項目と調査対象の英語学習への動機を測定する12項目の尺度を用いた。国際的志向性尺度はYashima, Zenuk-Nishide & Shimizu (2004) により4つの下位尺度で構成されることが想定されているため、「異文化友好オリエンテーション」(4項目)、「国際的職業・活動への関心」(6項目)、「海外の出来事や国際的問題への関心」(5項目)、「異文化間接近一回避傾向」(7項目)の下位尺度ごとに得点化を行った。まず、逆転項目の得点を逆転させたのち、各項目の得点を合計したものを項目数で割り、それぞれの得点とした。

英語学習の動機測定尺度として用いた12項目については、逆転項目の得点を逆転させたうえですべての項目得点を合計し、項目数で割った。本研究では、これらの得点を英語学習における動機測定得点とした。

3.2 結果

検証1. 4月に比べ7月の段階の方が英語学習の動機が高い。

結果 3.1に示した得点化により算出した動機関連得点に対して、測定時(4月、7月)ごとに平均値を算出したものが表3である。この群ごとの平均得点についてt検定を行った結果も表2に示されている。その結果、英語学習に関する動機尺度と異文化接近一回避傾向が有意であり、どちらも4月の方が7月の得点よりも有意に高いことが示された。

表2 動機関連得点の測定時別の平均値と標準偏差およびt値(n=74)

従属変数	4月	7月	t値 (df=73)
英語学習に関する動機尺度	2.34 (0.50)	2.25 (0.47)	2.05*
異文化友好オリエンテーション	2.64 (0.69)	2.60 (0.65)	0.63
国際的職業・活動への関心	2.31 (0.67)	2.37 (0.55)	1.08
海外の出来事や国際的問題への関心	1.79 (0.54)	1.81 (0.54)	0.45
異文化間接近一回避傾向	3.02 (0.54)	2.83 (0.55)	3.29**

( ) 内は標準偏差 \*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

表3 YLEの得点変化量と動機関連得点変化量との相関(n=72)

	英語学習に関する動機尺度	異文化友好オリエンテーション	国際的職業・活動への関心	海外の出来事や国際的問題への関心	異文化間接近一回避傾向
YLE得点	-0.08	0.07	-0.06	0.07	-0.06

表4 動機関連得点変化量のCan-Doリスト使用群、未使用群別の平均値と標準偏差(n=74)

従属変数	Can-Doリスト使用群 ( $n=14$ )	Can-Doリスト未使用群 ( $n=60$ )	t値 ( $df=72$ )
英語学習に関する動機尺度	0.08 (0.40)	-0.13 (0.35)	1.97 †
異文化友好オリエンテーション	0.09 (0.33)	-0.08 (0.64)	0.93
国際的職業・活動への関心	0.18 (0.58)	0.02 (0.37)	1.25
海外の出来事や国際的問題への関心	0.03 (0.44)	0.02 (0.47)	0.04
異文化間接近一回避傾向	-0.26 (0.69)	-0.18 (0.46)	0.52

( ) 内は標準偏差 †  $p<.10$

検証2. 動機得点の変化量はYLEの点数の変化量と正の相関がみられる。

結果 YLEの4月から7月の得点の変化量、および動機関連得点の4月から7月の得点の変化量を各得点の差を取り、その上で両者の相関係数を算出した。その結果は表3に示されている。YLE得点の変化量との間に有意な相関を示すものはみられなかった。

検証3. Can-Doリスト使用群のほうが未使用群より動機が高い。

結果 動機関連得点の変化量について、Can-Doリスト使用の有無条件別に平均値と標準偏差を算出し、表4に示した。Can-Doリスト使用の有無

条件別の平均値についてt検定を行った。その結果、いずれの動機関連得点についても有意な差は得られなかったが英語学習に関する動機尺度については有意傾向であった。

検証4. Can-Doリストの使用の有無によるYLE得点(学力)の変化

結果 Can-Doリストの使用がYLE得点(学力)の変化に与える影響を検討するために、Can-Doリスト使用群、未使用群ごとにYLE得点の変化量を算出した。平均変化量は表5に示されている。これらの得点についてt検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。



表5 YLE標準化得点変化量のCan-Doリスト使用群、未使用群別の平均 (n=78)

	Can-Do リスト使用群 (n=14)	Can-Do リスト未使用群 (n=60)	t 値 (df=76)
YLE 得点	0.000 (0.13)	-0.005 (0.12)	0.13

( ) 内は標準偏差

#### 4. 考察

各検証結果について考察し、その後、Can-Do リストを使用することの意義と課題を考察する。

検証1の「4月に比べ7月の段階の方が英語学習の動機が高い。」についての分析結果から、英語学習に関する動機尺度と異文化接近一回避傾向の2項目では、4月の方が7月の得点よりも有意に高いことが示され、4月から7月にかけて動機が下がる傾向が見られた。この傾向の理由を英語学習に関する動機尺度の各アンケート項目から探った。「はい」「どちらかといえばはい」の回答をまとめて合算し、4月と7月の回答を比較したものを図1で示した。英語を勉強する理由については「教科だから」が最も支持され（4月69.9%、7月75.7%）、「将来のため」との回答は4月時点で68.7%であったが7月には54.1%となった。一方「Q34あなたは英語の勉強は不必要（いらない）と思いますか。」の項目に「はい」「どちらかといえばはい」と答えたのは4月で16.0%、7月で

26.0%と10%上昇している。英語に対する有用感が薄れ、また将来に役立つから学ぶという動機が下がっていることが示されている。その原因として、「Q28学校の英語の授業は世界の人々とコミュニケーションするのに役に立っていると思いますか。」に対する「はい」「どちらかといえばはい」の回答の割合が4月で60.2%、7月で47.3%と約13%減少していることに着目する。Q28の回答の理由を自由回答したのを見ると、4月で「はい」「どちらかといえばはい」と回答した理由の中には、実際に留学生やボランティアやALTといった外国人と英語でコミュニケーションを取ることができたという経験を書いたものが多かった。7月には回答自体が減少したが、中でも自分の経験を書いた回答は2つだけであった。1つは「高校の時、留学生が多くいて、その時英語をよく使ったから。」と高校での経験を書いたものであり、もう一つは「ネットに書き込まれている英語のコメントを少し理解できるから。」と授業外での英

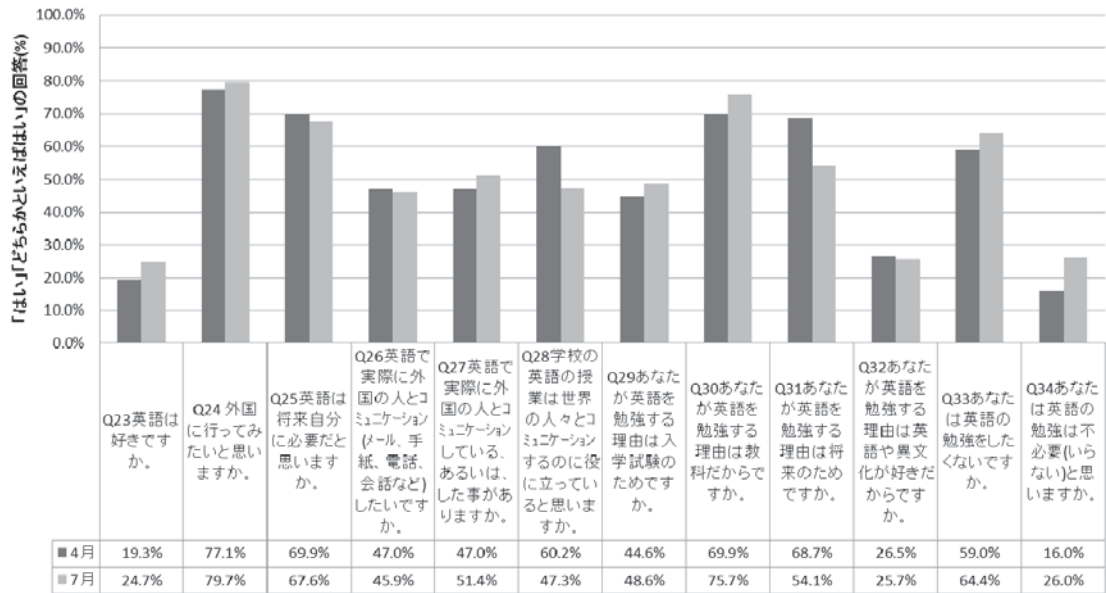


図1 英語学習に関する動機尺度に対するアンケート結果

語を使用したコミュニケーションの経験を回答したものであった。逆に「いいえ」「どちらかといえばいいえ」と回答した理由の中には4月・7月とも「使わない」「機会がない」との記述が半数ほど見られた。実際に外国人とコミュニケーションをする場面がないことから、英語が役に立つと実感する機会がなく、「役に立たない」「英語は教科だから勉強するのであり、将来のためではない」「英語は不必要」と感じていることが考えられる。

検証2の「動機得点の変化量はYLEの点数の変化量と正の相関がみられる。」についての分析結果では、動機の変化量はYLEの点数(学力)の変化量と有意な相関は見られなかった。つまり動機と点数に関連性がないことが示された。検証1の考察で述べたように、英語を「教科だから」と仕方なくやっている現状が反映されていると考えられる。

検証3の「Can-Doリスト使用群のほうが未使用群より動機が高い。」についての分析結果では、英語学習に関する動機尺度については有意傾向が見られ、Can-Doリスト使用により英語学習に対する動機が向上する傾向があることが示された。この傾向の理由を英語学習に関する動機尺度の各アンケート項目から探った。「はい」「どちらかと

いえばはい」の回答をまとめて合算し、Can-Do リスト使用群の4月と7月の回答を比較し、図2で示した。英語を勉強する理由については4月7月とも「教科だから」が最も支持されているものの、「英語や異文化が好きだから」との回答の割合が増加している（4月6.3%、7月21.4%）。また「Q24外国に行ってみたいと思いますか」の項目に「はい」「どちらかといえばはい」と答えたのは4月で62.5%であったが7月には78.6%に上昇している。一方、「Q28学校の英語の授業は世界の人々とコミュニケーションするのに役に立っていると思いますか。」に対する「はい」「どちらかといえばはい」の回答は4月時点で62.5%であったが7月には35.7%と26.8%減少し、「Q25英語は将来自分に必要だと思いますか。」に対する「はい」「どちらかといえばはい」の回答も4月で68.8%、7月で50.0%と18.8%減少している。Can-Doリストは異文化や海外に対する興味・関心の面で動機向上に効果があったと考えられるが、英語や英語の授業が実際に自分自身の役に立つという実感は得られていないことが示されている。

検証4の「Can-Doリストの使用の有無によるYLE得点(学力)の変化」についての分析結果から、Can-Doリスト使用群、未使用群に有意な差は見られなかった。

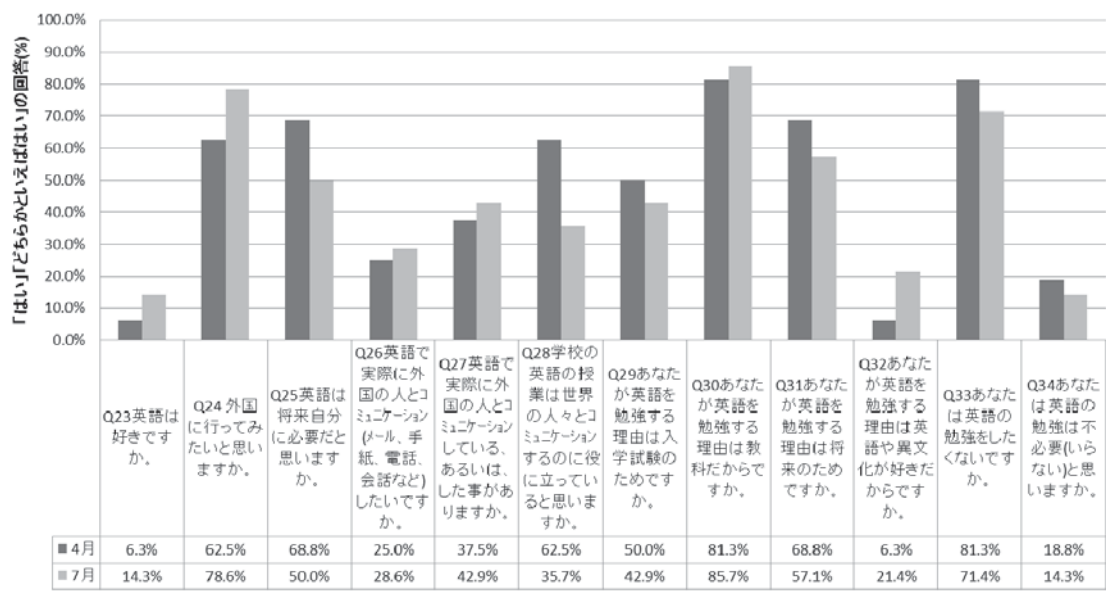


図2 英語学習に関する動機尺度に対するアンケートCan-Doリスト使用群結果

以上のことから、Can-Doリスト使用群の英語学習に関する動機尺度については有意傾向が見られたが、Can-Doリスト使用とYLE得点には有意な相関が見られない。これらのことを米田他(2011)の先行研究の検証結果と比較して考察する。米田他(2011)の先行研究では、本研究とは異なり、TOEIC Bridge50～80点台のCan-Doリスト使用群の英語学習に関する動機が有意に下がり、一方でYLE得点が有意に上がった。本研究と先行研究の結果が異なる原因として、使用した教科書の違い、授業中の使用言語の違い、Can-Doリストの違いが考えられる。先行研究では全てのクラスにおいて英語で書かれた教科書を用い、原則英語で指導を行ったが、本研究ではCan-Doリスト使用群のみ日本語で書かれた教科書を用い、日本語で指導を行った。教科書は中学校で学ぶ基礎的な文法を復習することを目的としたもので、英語に苦手意識を持つ学生にとっては、今まで習ったことを改めて学習できるためわかりやすく、これならできると前向きに授業に取り組むことができた様子であった。その一方、復習に主眼が置かれ指導も日本語で行ったため、新たな語彙を学ぶ機会は少なく、模試の得点が上がらなかったと考えられる。Can-Doリストについて、先行研究では具体的な学習のねらいを教科書のユニットごとにCan-Doリストにして提示したため、各授業で学ぶべきことやこれから学ぶことが明確になり、そのことが学力向上に繋がっていたと考えられるが、今回の調査ではCEFRのPre-A1からC1の各レベルのCan-Doに基づき、それぞれのレベルで学習言語を用いてどのようなコミュニケーションができるのかを示したりリストを用いた。また本研究の検証3で示された、Can-Doリスト使用群では異文化や英語に関する興味・関心の上昇は見られたものの英語や英語の授業が役に立つとの実感が得られていないという結果から、学力の向上に繋がらなかったことも考えられる。今後継続した研究が必要である。

## 5 まとめ：成果と課題

本研究ではCommon European Framework of Reference for Languagesに基づいたCan-Doリストを用いた指導が、英語を苦手とする日本人大学生

の英語学習者の英語力向上と動機づけに効果を与えるか、先行研究を踏まえて検証した。

本研究の結果としては、Can-Doリストの使用は英語学習に関する動機にはやや効果があり、特に英語や海外に対する興味・関心が高まる結果となった。同時に、英語力向上には効果があるとはいえないことが示された。

また、米田他(2011)の先行研究の分析結果との比較から、どのようなCan-Doリストを使用するかによって効果が異なる可能性が見えた。さらに、Can-Doリスト使用により英語や海外に対する関心が高まっても英語や英語の授業に対する有用感が得られていないことや、動機が上がっても学力向上に効果があるといえないことは、学習者全体において英語に対する有用感が減少する傾向と合わせて今後その要因を探っていく必要がある。

EFLという環境の日本で、英語を実用的なツールとして実感することは難しい。特に英語を苦手と感じる日本人学習者は苦手であるがゆえにますます英語を敬遠し、それによりさらに英語は「教科だから・入試だから」学ぶものであり自分の将来や生活とは無関係の教科にすぎないという印象を持つことが危惧される。Can-Doリストを日本に持ち込むことに関して課題は多いが、世界を視野に入れたCan-Doリストを導入することで日本人英語学習者が英語をグローバル社会の中での実用的なコミュニケーションツールとしてとらえ、目標をもって学習していくことができるよう、有効な活用法を見極めていかなければならない。継続した実践的研究が必要である。

## 謝辞

本研究は平成23年度科学研究費助成事業 基盤研究(C)課題番号23520765の研究の一部である。本研究課題遂行の機会を与えていただいたことに深く感謝する。また研究の遂行に当たり、協力して下さった方々に深くお礼を申し上げる。

## 執筆分担箇所

研究は共同で行い、本文執筆は以下の通り分担した。

細川 真衣：1, 2, 4, 5

西村 洋一：3

## 〈参考・引用文献〉

Educational Testing Service. "英検取得者のTOEICスコア". 2001.  
http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/TOEIC-STEP\_2001.pdf, (参照2010-4-29).  
Educational Testing Service. "TOEIC BridgeとTOEICテストのスコア比較表". 2006.  
http://www.toEIC.or.jp/bridge/pdf/data/Comparison\_BridgeandTOEIC.pdf, (参照2010-10-13).  
Council of Europe. Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (CEFR). 2012.  
http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Cadre1\_en.asp, (参照2012-8-20).  
Council of Europe. European Language Portfolio-Junior version: Revised edition. 2006.  
France: The Council of Europe.  
金沢大学外国語教育研究センター (n.d.)  
Common European Framework of Reference.  
慶應義塾大学外国語教育研究センター. 文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業 学術フロンティア推進事業 行動中心複言語学習プロジェクト 慶應義塾言語プロフィール調査報告書. 2011.  
慶応大学外国語教育研究センター. わたしの言語ポートフォリオ. 2006.  
JACET 教育問題研究会 "英語教師の成長に係わる枠組みの総合的研究". 平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書. 2011.  
日本独文学会ドイツ語教育部会、日本フランス語教育学会、大学英語教育学会教育問題研究会、神保科研、酒井科研、大崎科研. "CEFRの日本への文脈化を考える 第2回テーマ「ポートフォリオ」". 2011英独仏合同シンポジウム発表要項. p.1-74.  
物井尚子. 小学生を対象とした情意尺度の開発 (2). 東京純心女子大学紀要. 2009, 第13号, p. 27-36.  
森下玲子. ケンブリッジ英検KET——完全攻略ガイド. 2005, 東京：マクミランランゲージハウス. p.177.  
文部科学省. "『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について". 2002.  
http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm, (参照2012-10-1).  
文部科学省. " 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策". 2011.

http://www.mext.go.jp/component/b\_menu/shingi/toushin/\_\_\_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401\_1.pdf, (参照2012-10-1).

University of Cambridge ESOL Examinations. "Cambridge ESOL exams and the CEFR: The empirical perspective". 2009,  
http://www.cambridgeesol.org/what-we-do/research/cefr/empirical-perspective.html, (参照2010-4-29).

University of Cambridge ESOL Examinations. Movers Sample Paper. 2011.  
http://www.cambridgeesol.org/assets/pdf/exams/yle/yle-movers-reading-writing.pdf, (参照2011-04-01).

吉島茂、大島理枝 (訳・編). 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠  
Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment. 2004, 東京：朝日出版社. p.251.

米田佐紀子、西村洋一、細川真衣. Can-Doリストは日本人大学生の英語力と動機づけに影響を与えるか. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部紀要. 2011, 第4号, p.93-103.

Yoneda, Sakiko. & Hughes, Jason. A Research Toward Establishing Hokuriku Gakuin Standard Using a Global Standard-An Investigation into the Growth of Japanese Students' English Abilities across Different School Levels-. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部紀要. 2010, 第3号, p.99-110.



個人保存版

CEFR 各レベルの目標・ワランク上を目指そう！

STEP 英検	CEFR	聞くこと	読むこと	現在	一年後	会話に参加すること 口頭で自己表現すること	現在	一年後
1級	C1	相手立ててわかりやすく構成できていないくても、長い話を理解でき、テレビ番組や映画が理解できる	色々な種類の高度な内容のかなり長い文を理解し、内容を把握できる	14	14	言葉につまらず、流暢に、また自然に自己表現ができ、目的に応じた柔軟で適切な言葉遣いができる	14	14
準1級	B2	自分の専門分野なら複雑な議論でも理解することができ(ニュースについてなど)	具体的または抽象的な話題の、複雑な文章の内容を理解できる(新聞記事や小説など)	13	13	母語話者と自然にやり取りができ、いろいろな選択肢について長所や短所を説明して自分の意見を言うことができる	13	13
		メッセージの要点を理解でき、口頭または文字でまとめることができる(テレビ番組など)	文章を読んで、口頭でまたは文字で要約したり、翻訳したりすることができ(インターネットの文章や雑誌の記事など)	12	12	話し合いに参加して、自分の意見や考えを言ったり、それについて説明したりできる(授業で取り上げた問題など)	12	12
準1級 2級	B1	よく知らないこととがらを含んだメッセージを聞きとり、込められた気持ちや意図を理解できる(知らない言葉の出でくる物語など)	よく知らないこととがらを含んだ文章を読み、込められた気持ちを理解できる(外国の日常生活など)	11	11	本や映画のあらすじを説明して、自分の意見を言うことができる	11	11
		少し長いメッセージを聞きとり、その人の意見が理解できる(交流のある学校からのビデオメッセージなど)	少し長い文章を読み、そこに書かれている人の意見が理解できる(メールや手紙など)	10	10	前もって準備しなくても、会話の中で簡単な質問に答えることができる(テレビ番組や、読んだり聞いたりした物語など)	10	10
		過去や未来について話されていることが理解できる。休日にしたことや予定(Lucy might come to the party.)など。	少し長い文を読むことができて現在、過去、未来の出来事の違いがつく。(誰かの一日 Lucy has forgotten where she put her pencils.など)	9	9	前もって準備すれば、自分で選んだ話題について短く意見を述べ、質問に答える(The bus may not come because there's a lot of snow).	9	9
2級 準2級	A2	少し長いメッセージでも、要点や簡単な意見を聞きとれる、好き嫌いについての話(That smell makes me hungry.)など。	少し長い文章でも、要点や簡単な意見を聞きとれる、海外の友達や自分のこと(if it's sunny, we go swimming.)を書いた手紙など。	8	8	前もって準備すれば、自分で選んだ話題について短く話し、意見を述べることができ(That sounds like John. I think he's crying.)	8	8
		短いメッセージなら、要点やある程度の細かいことを聞きとれる、人や物についての説明など(What is your teacher like?)。	友達や学校での一日について(You could invite Robert to the game.)短い文なら要点やある程度の細かい事が理解できる	7	7	絵の色や形、好き嫌いを言うような簡単な会話を参加して、自分の意見を言うことができる(I like red, so I take this shirt.)	7	7
		短いメッセージなら大切なポイントを知ることができる。電話の伝言(How about going to the park tomorrow?)や天気予報など。	簡単な短い文章なら、要点を理解することができ、ハガキやメールの短く簡単なメッセージ(This is the dog I bought at the shop.)等	6	6	簡単な質問をしたり答えたり、興味のあることについて話すことができる、好きな食べ物や、趣味(I am good at soccer.)など。	6	6
3級 4級	A1	身近な語句をある程度理解することができ、自分の家族(My mother talks a lot.)、学校のことなど。	身近な表現を読んで理解することができ、ものの説明(Your house is bigger than mine.)、イベントについての文など。	5	5	簡単な質問に答えたり、身の回りのことなら情報を伝えることができる。学校(The school starts at 8:15.)やイベントのことなど。	5	5
		身近な語句をいくつか理解することができ、先生の指示や、曜日、数(She has two new animals.)など。	身近な言葉を見つけて読むことができる。身の回りのもののラベル、日付や天気(What was the weather like?)など。	4	4	単語や簡単な表現なら、言ったり繰り返したりすることができる。学校(The school starts at 8:15.)やイベントのことなど。	4	4
5級		身の回りの物についての文(What is your name? This is a book.)などの文を理解することができ。	色・動物・物の名前(banana など)について(Do you like cats?など)聞かれたら、(Yes/No or dog)など答えることができる。	3	3	色・動物など身の回りの物の名前について(Do you like cats?など)聞かれたら、(Yes/No or dog)など答えることができる。	3	3
N/A	Pre-A1	数(13~60)や文房具(gen. book)、家族関係(He is my father.)などの文を理解することができ	sun, hand など 3~4 文字程度の色や物の単語の単語を読むことができる。	2	2	紹介の詞など数(13~60)や文房具の名前、家族関係(my father)など絵や写真などを指しながら言うことができる。	2	2
N/A		身の回りの物の名前を言われたら何を指しているかわかる。	Alphabetの太文字と小文字を読むことができる。	1	1	数(1~12)や文房具(gen. book)、形(circle)など身の回りの物の名前を言うことができる。	1	1

【聞くこと、読むこと、会話に参加すること・口頭で自己表現すること、書くこと】の4つそれぞれについて、「現在の自分」「1年後の目標」を1~14の中から自分ができる最高のレベルに○をつけてください。

リストは英語が苦手な日本人大学生の英語力向上と動機づけに効果を与えるか

資料 1 Can-Doリスト

資料 2 動機アンケート(4月、7月とも同一のアンケートを使用)

英語に関するアンケート

学校名:

学科

イニシャル 姓 名

学年

クラス

番号

① いいえ

② どちらかといえばいいえ

③ どちらかといえばはい

④ はい

問 2 項目 28 の理由 :

※問 3 は質問用紙裏に直接ご記入ください。

1. 英語を使って世界中の人たちと会って話したいですか。

2. 英語を使って世界中の人たちやそのくらしについて知りたいですか。

3. 英語を使って世界中の人たちと一緒に仕事がしたいですか。

4. 英語を使って世界中の人たちと友だちになりたいですか。

5. 日本でも海外でもその人が住んでいる場所に関係なく、外国の人たちと友だちになりたいですか。

6. なるべく、外国の人たちと話さないようにしていますか。

7. 学校に外国からきた友だちがいたら、話しかけようと思いますか。

8. もし、外国の友だちができて、しばらく家に泊まることになったらいいと思いますか。

9. 近くにすんでいる外国の人たちに親切にしたいと思いますか。

10. もし、となりの家に外国の人がひっこしてきたら、なんとなくいやな気持ちになりますか。

11. レストランや駅で、日本語のできない外国の人たちがこまっていたら、助けると思いますか。

12. 自分の町にずっと住みたいです。

13. 日本だけではなく、いろいろな国に住んでみたいです。

14. 外国の人たちがたくさんいるところで、はたらいてみたいです。

15. 外国でボランティア活動をやってみたいですか。

16. 外国のできごとは自分の生活とあまり関係がないと思いますか。

17. 将来外国に出かけることの多い仕事をするのはいいですか。

18. ふだんテレビで世界のニュースを見ますか。

19. ふだんインターネットで世界のことをしらべますか。

20. ふだん新聞や本で世界のできごとを読みますか。

21. ふだん家族で世界のニュースについて話しますか。

22. ふだん友だちと世界のニュースについて話しますか。

23. 英語は好きですか。

24. 外国に行ってみたいと思いますか。

25. 英語は将来自分に必要だと思いますか。

26. 英語で実際に外国の人とコミュニケーション(メール、手紙、電話、会話など)したいですか。

27. 英語で実際に外国の人とコミュニケーションしている、あるいは、した事がありますか。

28. 学校の英語の授業は世界の人々とコミュニケーションするのに役に立っていると思いますか。

29. あなたが英語を勉強する理由は入学試験のためですか。

30. あなたが英語を勉強する理由は教科だからですか。

31. あなたが英語を勉強する理由は将来のためですか。

32. あなたが英語を勉強する理由は英語や異文化が好きだからですか。

33. あなたは英語の勉強をしたくないですか。

34. あなたは英語の勉強は不必要(いらない)と思いますか。

- 311 -

- 312 -